

土 淨

八月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 運輸 (特別授受認郵誌) 第三五二号
 昭和四十二年七月二十五日 印刷 昭和四十二年八月一日 発行

第三十三卷 ● 第八号



法然上人鑽仰会



善財童子藏

安倍文殊院

「我は烏帽子もきぬ法然房なり。黑白をも知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者なり」という法然上人の述懐が、二祖上人の書のなかに見えている。ここでいう童子は正邪善惡をただわきまえないというだけの意味ではない。明らかに、すなおに誰の言葉でも信じこむ純粹さが織りなされている。おとなの世界にある分別くささも、思いこんだら改めることのむずかしい色メカネ性を捨てることを教えている。それに引きかえ、童子には明るい、疑いのない、まかせきつた世界がある。おとなから見れば、故郷のような郷愁をさそう甘さが子供にはある。そのような純真無垢を仏性（仏になれる可能性）と呼んでもよいだろう。

善財童子はそのもっとも代表的童子である。安倍文殊院にある四尺四寸余の童子像は、文殊菩薩の脇侍四像のひとつとして、敬虔に手を合わせている。合掌の仕方もしっかりとしていて、道を求めるすなおさが出ている。口もとのあどけなさど、信頼しきつた眼のあたりにも彫刻者の描写のうまさがある。わたくしに強く教えさとす純粹性を、現代人はどう受けとったらよいのだろう。あもりにも懷疑的な今日にはひとつの指針となるのではなからうか。

（石上善応）

— 目 次 —

表紙「魚」松濤達文画

仏 心

..... 安居香山…(2)

しかし人々は求めている

..... 魚尾晃久…(6)

花のごとく世に処せん(10)

欲望について

..... 小沢憲珠…(12)

新興教団探訪⑦ 円応教

..... 藤井正雄…(14)

お茶をおいしく⑧ すすり茶

..... 三浦純亨…(18)

歴史夜話 謙虚な態度.....玉山成元…(20)

浄土宗のおしえ⑨ 念仏の利益

..... 丸山博正…(23)

御歌をいただく(25)

読者の声 慨嘆せずにはいられない(26)

連絡誌 みんなの法然さま・上人の往生

..... 高橋良和…(28)

話しのいずみ 馬になる気(31)

これを見むをりごとにおもひでゝ
南無阿弥陀仏とつねにとなへよ

法然上人御歌





山 香 居 安

家の子供が、何時の頃からか、亀を飼うことを始めた。これは去年の夏のことであつたと思うが、亀を飼いたいといいだした。或る夏の暑い日。

「亀を買いに行つてよいか」

とたずねてきた。生き物を飼うことはなかなか難かしいし、万一それが死ぬようなことにでもなると、可哀そうなので、私は余り賛成でなかった。しかし、余りの子供の熱心さにほだされて、それを許した。

「何処で売っているんだい。分らない。金魚屋か、そういった所に行けば売っている筈だ。とにかく探して買つてくるよ」

そんなやりとりをして、子供は暑い盛りに、自分でためた小遣いを持って出掛けて行った。もう夕方になるのに一向帰つてこない子供を心配して、私は何度も表に出た。

「ただいま」

そんな声に引かれて、表に飛び出した私は、汗びっしょりになって、泥亀を手にしてゐる子供を、そこに見た。

「随分遅かつたじゃないか」

「なかなかみつからないんだよ。それでも何軒目かの金魚屋でやっと、みつけたよ」
聞けば随分歩いて探してきたらしい。少くも二三里は歩いているようである。別に一軒売っていた家もあったが、高いのでやめたいらしい。買ってきた亀は、泥亀ではあるが、かなり大きいものであった。甲羅が少し欠けていた。

「おばさんが、甲羅が欠けているから、百円にまけてくれた」

いかにも誇らしげに、そう言つて亀を高々とさしあげた。値ぶみして、ねぎつてきた子供に、私は苦笑した。



心 | 仏

それからは、毎朝、早々と起きて、みみず探しが始まった。日頃寝坊の子供にしては、大できであつた。亀の観察も緻密で、理科の勉強によいと、親は喜んでゐた。子供も熱心に世話をしていた。

ところが、或る朝、その亀がいなくなつてゐた。鹽に何枚かの板で蓋をしてあつたのであるが、夜の内に逃げてしまつた。或は、猫にでもとられてしまつたのかもしれない。子供はぼう然として、しばらく口もきかなかつた。それでも、あきらめの早い子供は、すぐ鹽を片附けてしまつた。私も死んだよりはましであつたと、心慰めた。

○

この頃、また亀を飼いたいと言ひ出した。多分、友達が飼っているのにも刺戟されたに違ひない。

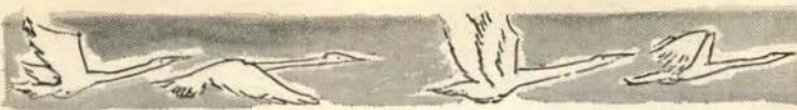
「前の例もあるから、余程注意しないといけないね」

「今度は、小さいのにするよ。それに逃げない様に、ガラス鉢の大きいのを買つてくるよ」

そう言いながら、ガラス器がよいか、プラスチックのがよいかと、盛んに聞いていたプラスチックのは破れなくてよいが、曇りやすいということなども研究していた。そして、或る日曜日、又小遣いを持って出掛けて行つた。今度は大分、高いのを買つてくるらしく、貯金も前からしていたらしい。

今度も、やはり汗びっしょりになつて、大きなガラス器を抱いて帰つてきた。その中には小さな二匹の亀がいた。

「南方産の亀で高かつたよ」



そう言いながら、ガラス越しに動いている亀を大事そうに眺めていた。青色の甲羅をした大小の美しい亀であった。石と砂利を入れて、子供は適当に水を入れてやっていた。塩気の魚は食わぬということで、白魚を水にしたしたもの、毎朝やっていた。水も時々取り替えていた。

朝出掛ける時にのぞいてみると、大きい方に小さい亀が乗り、長い首を二匹ともたげている光景は、まことにユーモアで、皆で大笑いすることしばしばであった。私も、朝夕に、この亀鉢をのぞき込んで楽しんだ。

或る日、旅から帰ってみると亀が一匹しかいない。

「どうしたんだ」

「死んだんです」

家内はそう言って、旅行中に起ったでき事を話した。何でも、朝起きてみると、大きい方の亀が、仰お向けになって死んでいたらしい。石から落ちたひょうしに、仰お向けになり、起きられず窒息したらしいと言った。或いは病気で死んだのかも知れないとも言った。二三日前から、あちらこちらに白いものができて、子供が大騒ぎしていたことも知っていた私は、結局、飼いがうまくいなくて、死んだと判断した。

「それにしても、子供は驚いたろう」

「ええ、朝教えてやったら、びっくりして飛び起きてきて、又すぐ寢床にもぐり込んでいました。布団をかぶって、泣いていたらしいですよ。妹の方は、兄が可哀そうだと言って、大きな涙を流していました」

家内の報告では、日曜の朝は、そんなわけで、大変であったらしい。気の弱い兄は布団の中で泣き、妹は兄が可愛そうだと言って泣いていたという。小学生と幼稚園児との



間で交されたこの情景を、私は頭の中で描いてみた。

「その亀はどうしたんだい」

「もう、子供が、墓を作ってやったらいいですよ」

私は、子供の悲しい心を、これ以上ゆさぶることを恐れて、亀については、余りふれなかった。ところが、その夕方、小亀の方も死んでいるのを、私はガラス越しに発見した。それとなく、私はガラス器に注意していたのである。

「又、亀が死んだよ」

二階で勉強していた子供に、私は思わず叫んだ。子供も、又びっくりして飛び出してきた。そして、小亀を手のひらに乗せ、しげしげとみていた。

「仕方がない。早く墓に入れてやりなさい」

子供は黙って雨の降る表に、シャベルを持って出て行った。そして、垣根の側にある亀の墓を掘り出した。私は窓越しに子供の姿を見ていた。子供は泣いていた。涙がポロポロ落ち、手はふるえていた。泣き声こそあげなかったが、可愛そうで、私は目をふせた。

「線香をあげてやりなさい」

帰ってきた子供に、火のついた線香を一本やった。子供は又、雨の中に飛び出して、亀の墓に線香をたて、しばらく拝んでいた。妹娘がせがむので、私も二人でその墓に行ってみた。丸い石に「カメノハカ」と刻んであった。

家内に聞くと、半日もかかって、この墓石を作っていたという。

私は、涙を流しながら墓に埋めていた子供といい、この固い石に半日がかりで墓字を彫ったことといい、そうした淡い子供の心の中に、仏心の宿っていることを見て、吾が身を反省せしめられた。親は子供からも、いろいろと教えられるものである。



魚尾晃久

しかし、人々は求めている

——教化会議を終って——

—

「あるべき現代寺院の働きについて、お寺側とだん信徒側の両面から検討を加え、本来の仏教徒の姿にかえて、地上に足をふまえた生活の糧になる仏教をつかむ」のを目的とし、宗派を超えた会議開催の案内状を出しました。会議と名がつく以上、参加者の発言を期待して、「仏教教団のいかしにかた」「仏教を私たちの生活にいかにとり入れるべきか」「青年と仏教」の討議のテーマを定めました。そして、出席者としては、なるべく家庭の主人公、若い方々をと希望してやりました。

参加者は結局、九十五名、十代五名、二十代十一名、三十

代五名、四十代十二名、五十代十六名、六十代二十九名、七十代十六名、八十代一名で、男五十九名、女三十六名という割合です。年令と男女割合とから考えてみますと、何かしらを期待し、何かを発言しようという意欲は見られました。私の提唱「ゆがめられたる仏教を正す」と講師友田達明師の「仏教徒として自己をそだてる」を除いて、参加者に三時間の発言の時間をとりました。活潑に手があがって、もっともつと時間をほしく感じただけは私だけではなく、昼食と記念写真に三十分をさいただけ、休憩もとりませんでした。

十三名の寺院側も各宗の方々であり、参加者も私の寺の檀徒は二十三名しかいませんでした。これは、私の檀徒への滲

透力が弱いという欠点を示すものではありませんが、檀徒だけでなく三島市を相手としている結果の現われともいえるようです。

二

さて、会議の内容ですが、私の提唱が、三宝を根底としたものであったためか、全く宗派臭がなく出発しました。「佛教教団の生かしかな」では寺院側の伊藤峻将師が司会をし、教団の範囲を現実の既成教団、つまり、目前の寺と檀信徒の關係に限定しましたが、折角、釈尊の教えがありながら、それを、特に理想教育面に十二分に活用し得ない無力さが指摘されました。若い人々の乱脈な生活を喰い止めてほしい、という熱望が多くの人によって述べられましたが、現存寺院の無力を体験的に言及した方がありました。それは、子供が戦死したので經典をよんで心の苦痛を軽くしようとしたが、全くわからない。そこで檀那寺に行って阿弥陀經を講義してくれといったところ、とても解るものではない、ナムアマミダ仏を称えていればよい、とつっぱねられた、というのです。教団の生かしかなについての重要な問題です。ナムアマミダ仏でも結構ですから、それを徹底させればよかったです。その人は、それから、僧侶のチンブンカンの読經に嫌悪をさえ

感ずるようになった、というのです。死んでしまった形だけの教団の醜態とでもいうのでしょうか。私たちには耳の痛い一幕でした。「僧侶はもっと勉強しなくてはいけない」と言を結びました。勿論、全部の僧侶がそうである、というのではないのですが、一般的にみても当然ずといえども遠からずの感がありました。

三

仏教は信仰と、その実践にあるのですから、お経がよめても、それが真実の信仰かどうかは問題なのですが、よむお経の意味がわかることが望まれているのは事実です。確かに僧侶は、お経はよみますが、それが直ちに僧侶の信仰に結びついていると世人は思っていてくれないようです。従って、訓読のわかる經典を手にして、共々によむことが現在なされるべき緊急のことのようです。これは、寺檀が密着していないことを意味することでもあります。

ところが、戦後は、もっとわかり易いお経をよんでほしい、もっと話をしてほしいという要求が強くなっている。これは、戦前にはなかったことで、戦前は法事などで話をする、話をききに来たのではない、といって嫌われた、なぜ戦前からそういう要望をもたなかったのか、という反撥もありま

した。これは、徒に、言論の自由にかりて、人の無能をつくの快しとする現代世相への批判でもある、と思われました。

結論としては、この項に関する限り、寺側としては、寺の催しには積極的になってほしい、信徒側の方からは、坊主よ、本物になれ、という叫びとに終ったようですが、自信教人信でなければならぬ、と強く感じたことでした。

四

次のテーマ「仏教を私たちの生活にいかにとり入れるべきか」は私の寺の世話人関谷久治氏四〇代の司会で行なわれました。同氏は神田寺の教化会議を経験された方、生活の中心になるのでお寺であればよいので、仏教の実践なくしてはこの問題にふれ得ない、という司会の前提の言葉から出発しました。まず、物を大切にすることこそ仏教の生活的なものである、という実際的なことから検討されました。紙一枚を何故大切にすることを論じ合うことよりも、黙って大切に扱うことだ、中味をわかろうとするよりも、静かに坐る、やってみることが先決だ、と和訳経典で有名な三角博士の言を用いての意見発表がありました。

しかし、多くの青年たちは、仏教なんかは見向きもしはし

ないのが現実です。そこで、それに対してどうするか。仏式結婚によって和合の生活の原理をきかされて以後、うまくやっているという婦人の感謝の言葉がありました。如来さまのお慈悲を心から有難く感じて、六年間、南無阿弥陀仏の生活を続けている、名実ともに仏教を生活に生かしている事実。われるような拍手でした。

問題は、いかにとり入れるかの方法論にもどり、どしどしとり入れよ、との声がありました。幸い当日、東京、仏教タイムスの編集長山中竜淵氏が持来された「ありがとう運動」推進のことは「ありがとう、このふだんの生活の言葉のなかに、私たちは仏教の根本精神を見いだします。私たちはいのちの環を厳しくつなぐこの言葉を大切にし、新しい風を求め、明るい楽しい仏教をめざし、ありがとう運動を願いをこめて提唱いたします」が朗読され、この身近かなことに同調すればよい、と提案されました。

だが、こうした会議に来る方は別として、人々は余りにも仏教を知らなすぎるのです。そこで、どうしたらよいかが更に論議されました。六波羅蜜を実行せよ、合掌運動を起したら、と色々提案がありました。中に、ことある毎に三分間ぐらいて、ごく簡単に、わかり易く話をせよ、という要求が

ありました。これは大変よいことなのですが、実は、話す方にしてみれば大変むずかしいことで、よほど仏教に詳しくないと出来ないことのようにしょう。

布教コンサルタント代表委員の昼間興威師が「教材通信」

(神田寺教材資料誌)に「寺院と檀信徒との関係は、今日の意味あいでは、信仰上からいっても微妙なズレを感じるのが例である。それは長い歴史の流れもさることながら、寺院そのものの位置、すなわち大衆の中に融合しきれぬ別世界といった感じが、ことさらにその溝を深めているのであろう」と述べていられる通りで、とりつきにくい仏教になっているのですから、(いかにとり入れるか)の問題の比重は、特に青年層にかかっているのです。従って、この問題と青年と仏教の次のテーマと関連して考えられたわけですが、若きある女性はお寺に行って話をきき行をしてみても琴線にふれるものが少い、むしろ迷惑をさえおぼえる、というのです。私が、幼児が仏前で小さい手を合わせて「ののさま」というのは、母親が教えたからであるから、若き人々の手を引っぱらなければいけない、といったことへの反撥のようでもありませんが、何とかして、心を満たすものを仏教の中に探し出そうとする意欲の見られることはうれしいことでした。「青年

と仏教」の司会は当寺の特信者で三十四才の小柳巖氏、東京在住、やはり神田寺の教化会議に行った方ですが、若き人々の前向きな姿のよさの中にも、理想を迎いすぎて、現実ならざる現実におぼれ勝ちであることに注意を与えながら討議は続けられ、青年層に、宗教に近づくべき土壌をどしどし与えねばならない、と結論づけられました。

最後に、「私たちは、みほとけの道を正しく把握し、どんな小さなことにも感謝の念をもって、それを生活の中にとりいれ、積極的に行なうことを約束します」と一同、誓い合いました。それに先だって、全体会議で、政治が悪い、社会が悪い、といって自分と関係のないようなことをいう人が多いたが、そうでなくして、おれたちが悪いんだ、と受けとって努力して行きたい、という見解が披露されました。立派な御意見だと思えます。宗派を超えて、しかも、僧職教化者と檀信徒とが一堂に会しての教化会議の私の企画は、こんな風にして終りました。昼食、おやつ、写真代など一切当山もちで費用がかかったわりに、何を握んだか、といわれると返答に窮するのですが、私は私なりに、次の会についてのことを、既に頭の中に計画しているのであります。(三島・願成寺住職・富士見丘女子短大教授)

◇ ◇ ◇

世に処せん

花のごとくに

仏壇とお花

伝えるところによると、日本に初めて仏壇が出来たのは、天武天皇の十三年ということになっていきます。

この時までは人々は、それぞれ近くの寺に行って信仰をし、修養をしていたのでありません。

しかし、これには色々な不便が伴ったのであります。

雨の日、風の月、或は多忙な日常を送る人々にとっては、お寺詣りは容易ではなかったのです。

これらの不便を除くために考えられたのが仏間であり、仏壇であります。

◇ ◇ ◇

言い換えれば、お寺を各家庭に持ち込んだのが仏壇の起源であります。

このお仏壇のある所が仏様の御座所であり、先祖をお祀りするところであり、また同時に私共にとって最も大事な信仰修養の道場でありますから、この仏間は一家の中では、最も大事な信仰修養の道場であり、最も大事な信仰修養の道場であり、最も大事な信仰修養の道場であり、最も大事な信仰修養の道場であり、最も大事な信仰修養の道場であります。

ところが、そのうちに誰かが死んで、その位牌をこの仏壇にお祀りする。

この部屋は一番上等の間だから、お客様もお通しする。

たまたまあたらしい位牌が仏壇にあると、お客様はこれを見て、この一家に最近不幸があった事を知って、その心は悲しみにと

ざされる。

お客様にうれいを与えることが、失礼であるということから、仏壇は次の部屋に引越すことになったのです。

この仏壇が引越をしたその跡が今日の床の間です。

今日各家庭のお座敷の床の間は仏壇の遺跡なのです。

仏壇がなくなったあとの壁ぎわは如可にも殺風景でものたらない、その間を塞ぐために掛けられたのか掛軸であります。

それでもなお物淋しいのを補うために花が残されたのです。

これからお話ししようとしていますことは、この花についてであります。

三世因果業報経には

「花の如くに世に処せん」

と述べられていますが、大変良い言葉だと思えます。

花を見れば誰の心もなごみ、ほほえましい気持ちに誘われます。

仏壇はこの花のように「ニコニコと清く美しく生きよ」と訓えられたのです。

一 輪 の 花

栃木県H製糸工場は県下第一の不潔な工場として再々監督官の注意を受けていました。

工場当局者の忠実な改善への努力にもかかわらず、依然として不衛生な状態は改まるべくありませんでした。

女工員の寮は埃にまみれ、工場の片隅には塵がうずたかく積り、便所は足の踏場もなく汚れていました。

この悪臭と汚穢の便所の高窓に、いつの頃からか一輪の花を投げ入れたサイダー瓶が置かれるようになりました。

花がしほみかけるといつの間にか、また新しい花にとりかえられていました。

このようにして幾週間かが過ぎた頃、何時も乱雑に脱ぎ捨てられていた便所の下駄がきれいにそろえられ、切れた鼻緒がたてかえられてるのが見受けられ、便所を汚す者がだんだん少なくなって行きました。

又、丁度この頃、寮の工員達の机の上には、そこそこ一輪ざしが置かれるようになった。

りました。

最早この工場のどここの隅にも塵埃の山は見当らなくなりました。

かくて一年後のH製糸工場は県下第一の衛生的な模範工場として知事から表彰されたのであります。

人知れず便所の窓にサイダー瓶の一輪ざしを掲げた者は、当時、新らしく入社したKという女工さんであることが判明しました。

工場が表彰を受けた当日、このミスKも同時に社長の表彰状を頂き、彼女の頬はバラ色の如くに明るく輝いていました。

工場の花壇には燎乱たる百花が匂っている。

一輪の花が全工場を美化し、全工員の心に万葉の花を咲かせたのであります。

汚くよごれた心には汚いものは目立たないが、美しい心にはよごれはすぐ目立つものです。

私は誰しもきれいな環境の中に住みたいと思いますが、そのためには、先ず自分自身の心を美しくすることを考えねばなりません。

花は人の心を美しくしてくれます。

菊 花 か ざ し

これは朝日新聞の天声人語に語られたことです。

郊外に向うバスに乗っていると、とある停留所で一人のお婆さんが菊の小枝をかざして待っていました。

バスがとまって乗るかと思うと運転手は体をのりだして、お婆さんから菊の花とチリ紙に小さく包まれた物を受取りました。

老婆は運ちゃんのおふくろだったのです。

運転手君は菊の花をかたわらの花ざしに投げ入れました。

そして手早く紙包みを開くと、中から赤い羽根が二つ出てきた。

運ちゃんは一つを自分の胸にさし、もう一本はと見てみると、運転台のガラス窓にぶらぶら揺れている縫いぐみのマスコット人形の胸にさしました。

運ちゃんは、おふくろの方へニコッと笑顔を見せてギヤを入れた。

バスはどろんこのデコボコ道を大揺れに揺

れて走り出しました。

菊の花も赤い羽根をつけた人形もゆらゆら揺れた。

乗客達の顔も自然にはころびて、なにか乗しそうな思いを心の中で温めているかのように見えました。

この運転手君は朝早い出勤なので、赤い羽

根を求められなかったのでしょう。

それでおふくろが、息子のための赤い羽根と、マスコットのための赤い羽根とを買って、バスの路線の停留所で、やがて来るであろう息子を待っていたのであります。

なんとここにきまでに美しい母子の心ばえであります。

こんな運ちゃん車なら絶対に安心して乗れましょう。

此の頃のバスは殆ど全部が、ウインドグラスのあたりに一輪さしを持って居り、その中の花は如何ばかり緊張し疲れた運ちゃん心の和まし、また乗客の心を柔けていることでありましょうか……………。

欲望につて

小沢憲珠

仏陀は、自己の欲望を否定するところによつて、そこに涅槃への道があると説いたという

ことはよくいわれる。相應部經典二三には、弟子のラーダとの問答があつて、つぎのように涅槃へ至る課程が率直に説かれてゐる。

「大徳よ、何のために正観するや。」

「ラーダよ、厭患のために正観す。」

「大徳よ、何のために厭患するや。」

「ラーダよ、離欲のために厭患す。」

「大徳よ、何のために離欲するや。」

「ラーダよ、解脱のために離欲す。」

「大徳よ、何のために解脱するや。」

「ラーダよ、涅槃のために解脱す。」(南伝

卷一四、二九八頁)

この一連の課程は仏道を志すものにとつては、その基礎であり、またわかりすぎる程よくわかる論理である。欲望を離れねば涅槃は

得られない。ところが欲望というものはくせものであつて、それを離れろといわれても、

なかなかできるものではない。

肉体にともなう欲、感情にともなう欲、それらは数限りのないものである。しかし経はまた次のようにいう。

「ラーダよ、もし色あらば、魔、殺者、死者あり、ラーダよ、故にことに色を魔なりと観じ、死者なりと観じ、病なりと観じ、

癰なりと観じ、刺なりと観じ、痛なりと観じ、痛種なりと観ぜよ。このように観ぜば正

観となす。」(南伝卷一四、二九七頁)

と、受想斤識についても同様に説かれるが、こ

ここではそれらを徹底的にいみきらっているようである。もちろん、その裏には無常観などの教理的なささえがあるのであろうが。五蘊とは自分自身に外ならないものであるから、それにともなう欲望も当然否定される。

ところが人間である以上、誰でも自分に執著し、自分を愛しいと思う気持がある。むしろその為にこそ文化文明の発達もあるといえる。自己愛の為に自分を向上させる、満足させる、そういう力が社会を成り立たせている。もし経の説くように、自己を否定し、欲望を否定したら、どういうことになるのだろうか。しばしば自分を無にしてこそ自分は浮ぶことができるのであり、また煩惱即菩提などというが、それを承知の上で、さらに仏陀の教えを一方のみからながめているという非難覚悟で、そのような疑問がやはりある。種々の經典にあまりに多く説かれるからである。

相應部經典三には次のような偈がある。

「思は總ての方面に行けども、

己より更にいとしきものに到るなし。

かく他の人々にも自身はいとし、

故に自愛のために他を害する勿れ。」(南伝 卷二、一三〇頁)

つまり自分が一番かわいいものであるといっている。前の一偈はおそらく人間の本来性をついているであろう。そして後の一偈は、自分がそうなら他人も同じように自分がかわいいにちがいない。だから他人を害してはならないのだというのであり、そこに宗教的発展性がみられる。

だが、その宗教的な面の根底をささえているのは、自分がかわいいということである。他人が先にあって、それを正観するところにより、そこに慈悲心を引き出すのではない。あくまで自分という人間が中心であり、しかも自分に対する愛着、かわいいとする欲望それらは決して否定されてはいない。仏陀の教えが我々の胸にせまるのは、案外その辺にあるのかもしれない。

小部經典一の自説経に、

「もし一切時において水あらば、

井戸を以て何をかなさん。

愛を根本より破折しては、

何ものをか尋ねて歩まんぞ。」(南伝卷二

三、二一五頁)

という偈がある。これは仏陀がある村に遊行したとき、阿難に命じて、井戸へ水を汲ませに行かせた。ところが村人は水を飲ませまいとして、井戸に草などを投げこんで汲めなくしたのである。しかたなく阿難はこの旨を仏陀に申した。しかし仏陀はその事情を承知の上で何度も阿難に水を汲んでくるように命ずるのである。この偈はこのときのことで、そこには求めに求め、執着に執着を重ねて自己の目的につき進む激しさがある。

以上は思いつくままの經典の中から、欲望についてみたのであるが、欲望は一方では否定されるが、一方では肯定されている。実に難解というより外ない。

新刊紹介

佐藤密雄著 (B3判 九六頁)
(価一五〇円 T三五円)

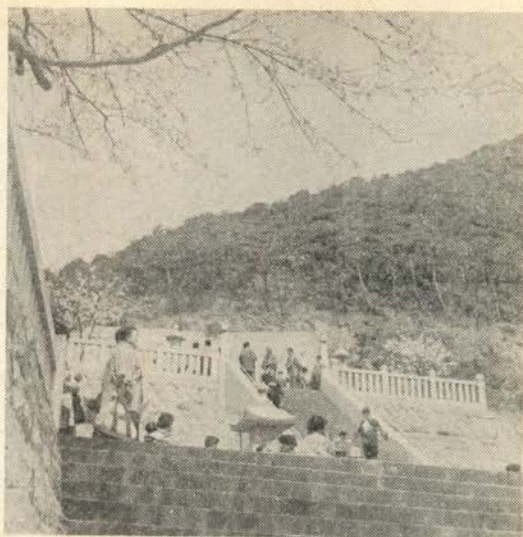
講本 大乘戒

大乘經典における菩薩戒の要項・梵網
經菩薩戒本の訳註

發行所 大道社

お申込みは本会へどうぞ

関西の味
円融一如・生活即宗教をとく



円 応 教

藤 井 正 雄

立教五十周年をめざしての奉仕行

朝日放送では毎週火曜日、朝五時五十分から十分間、近畿放送は毎週日曜日朝六時二十分から十五分間、静かな朝食まえのひととき京阪神地方の人たちに「世のなかの道具になれ」と円応教への入信をよびかけている。

教会数一九一、布教所数四二〇、布教師数一八〇〇余、信者二十余万（昭和四十二年一月六日現在）を擁する円応教は、本部を兵庫県米上郡南町村森一の一におき、近畿地方を中心に同心円状に小倉、岐阜、静岡、東京に教勢を布いている。二万五千坪の広大な本部の敷地には、教祖の墓所、霊殿、仮本殿、修法殿、修行所、青年道場、幼稚園がある。本年七月十六日に立教五十周年を迎えた本部は、記念行事として鉄筋五階建ての大本殿の建設をめざして基礎工事が行なわれ、信者による奉仕行が、日ごろ持ち慣れない、くわやすき、シャベルを手に、スカート姿やスラックス姿の女性会員をまじえて汗と泥にまみれている。

数奇な教祖の生涯

教祖深田千代子は、明治二十年十月三日、

兵庫県水上郡小川村(山南町)井原に父難吉、母かるの長女として生れた。本名はいち、千代子は俗名であった。千代子の短い三十九年の生涯は恵まれたものではなかった。数奇な運命は幼い頃、父難吉が酒好きのうえ事業に失敗し、母の内職で細々とくらす生活からはじまった。学校には行けず、数え年で十才のときには井原村の後藤家に子もりにやとわれ、二年の奉行の後、母の死にあつて、十三才に父と幼い弟二人の母親代りをつとめなければならなかった。

二十一才のとき、隣村の呉服屋の番頭笹倉三治と内縁を結び妊娠結婚、翌四十一年三月には長子長治(現会長)を出産した。しかし、その間に夫はのれんわけして独立し、たまたま伊子がすりを仕入れに道後に掛けたが、大阪の旅館で知りあい同道した二人に欺かれて金品を奪われたうえ、山中で毒殺されてしまった。長子誕生の後わずか一カ月もたっていないかった。

未亡人になってからは、父に子供をあづけて飲食業に精をだした。しかし、縁は異なもの、田舎まわりの芝居一座がおとつれて、そ

の一座の花形河合静雄と親しくなった。その後、大阪に帰り九条新道の繁栄座の座長をつとめていた河合静雄との文通は一年もつづいた。

しかし、飲食業にいくら精をだしても父難吉の酒好きと父のふるまい酒のたにめに生活はますます困窮していき、意を決して長子を父に托して、河合静雄を頼って大阪にいき、結婚した。

大阪での生活は、夫に任せ、内職して父子に送金するという円満な家庭生活であった。夏の暑いときでもすぎのない身だしなみであ

ったことから世話づきな「御殿うらの丸まげの奥さん」と呼ばれて評判であったという。

突如として神がかる

千代子は十三、四才まで「人を神と思え」「どんな暮しをするとも心の品は落としてはならぬ」と父から絶えず教えられた以外、信仰をすすめられても、「神仏は、いや、きらい。私は神仏に参るような悪いことはいたしておりません。」と答えるのが常であったという。たまたま二階に住んでいた人が引き払い、柱のすみに歓喜天や金毘羅や諸天のお札がそのままあったことから、棚をつくって祭



教祖の墓地へ参拝する信者たち

ったほかは合掌することもない生活であった。はじめに神仏に参ったのは大正七年で、仕立物をもつて出入りした野田某に熱心にすすめられるあまり、聖天様に参詣した。翌八年三十三才の四月ごろから透視する能力が具つてき、七月十六日の月夜に雨戸を開け、あまりにもお月様が美しいので



合掌したところ、突如そのまま上にあがって動かなくなってしまった。今まで主人に従順につかえてきた千代子は、はじめてき然と主人に對座して、

「この女、生れつきよりそなわり、四十になれば、神の使いしめに生まれ、世の中の道具になる生まれであるが、余り世の中が進み、七年早く行人となり、世の道具になるか、靈で働かすか、姿で働かすかと、申しわたした。主人は、

「姿で働かしくだされ」

と、答えた。それから十九日までの四日間、一室にとじこもり、一睡もせず、食事もとらず、片ことをしやべっていたという神がかり状態がつづいた。

その後、夫婦関係を絶ったが、仕事をする
と病気になる、隣の人が、病氣だから助けて下さい」と無理におし入り、話をする可不

思議にも病氣がなおったことから、いつのまにか「不思議な神様」と知れ渡り、訪問客がつづいた。結核三期の娘が、千代子の与えた大根おろしで僅か一カ月で平癒したとか、関大生に卒業試験の出題を当てたとか……人の心出来事紛失物の行方、犯罪人の所在などを予見し、憑靈、つきおとし目在となつていった。

大正九年六月に家主から近所迷惑と迫立てをくい、警察には不当な金品の欺取、信者との姦通を勘ぐられて五日間拘留され、人集めをしないと言質をとられて釈放された。しかし、それでも信者はひきもきらず、やむなく能登、神戸、明石、岡山、福知山と信者に乞われるままに信者宅を転々とし、天啓の予言通り、大正十四年一月六日まで七年間教導して、永眠した。行年三十九才であった（田子住代子編「みおやのわざあと」(一頁—二九三)頁より)。

教団の設立へ

千代子の死後、直接教いをえた信者があいつといふ千代子を教祖と仰ぎ、修法の研鑽にはげんでいたが、昭和六年二月六日に深田家の

菩提寺妙心寺派住職林誠道師を会長に円応教修法会を結成、昭和八年には仲実義師を会長に円応教報恩会を設立、戦後、宗教法人令の施行により教祖の一子、長治（現会長）をたて宗教法人円応教が設立された。

教義の体系化

教祖は貧乏のため小学校に行けず、紙を買うことができないので、子守りをしながらいろはを土のうえに書いては習ったといい、「千代子の筆のさきは、人様より習わず、また学校に行かず、生れ我のかんの筆のさき」であった。

遺文は、大正十年五月五日消印のある書状からはじまり、信仰対象十一集、自叙文九集、書簡集二百五十二集、随感録二十五集、行衣添書三集、会計四集、行場日記二十二集などが三巻にまとめられ編集されている。

しかし「私のひらかなは、人並とは、わか





青年道場の落成

りかねます故に、初めては、なおくだりかねます故、あらあらと致します、二三度繰り返して判じ下され」とあるように、遺文は靈感のおもむくままに書かれたことから、大阪なまりや地方の方言がいりまじり、句読点もなく、体系的でもなくきわめて難解である。

現在、教団が用いている教典は、これらの教祖の遺文を抜萃し、それに現教主が作成した日課動行文とを合せてなっている。

立教の本義は「世の中の道具になる」であり、円応（千代子の戒名である、円応智覺大師よりとられた）の字義のごとく、円の中心―宇宙森羅万象の中心、宇宙生命、大御親―より無限大の円周に生成化育発展する永遠の生命と、この中心を求め、信じ、崇め、応じ、融合しようとする永遠の今の生命との脈々を通じている円融一如の生き方・生かさる方、生そのものの真言のくらしにある。（教義概要）二〇一一頁。

すなわち、個人の愛と誠とをもって、個人の霊能の自覚と發揮につとめ、大御親を信じ、行することで、天地同根、万教一元、物心一如、生活即宗教を説き、教義の五綱として「ま（宗教対象）」「誠」「愛」「陰の行」が説かれていた。

霊感力を養う修法

「人間はいつかは、早かれ遅かれ死ななければならぬ。まして千代子は今まで人間としての行をしていたが、今度は、その百姓や人間らがきらいになって魂で働くのだ」（『みおやのわざあと』二九三頁）との父親の言葉に窺われるように、教祖の霊導を信じ念じ、大御

親との合体を行するのが「修法」とよばれるもので、霊感動して「手の先に不思議ならしめ」があり、それによる「うかび」によって自覚、反省、さんげして生活の指針とするものであるという。うかび―直観的霊感力―は仏教語で阿頼耶識による霊力であると説明されている。

教団組織の充実と宗教協力

立教五十周年を迎えた教団史は、難解な教祖の遺文の体系化への道でもあった。現在、

「円応」、「円応青年」などの機関誌をみるかぎり、教義の解説のほかに、教義と家庭生活、青年、青年のヴィジョンが語られ、病気がなるとか金が儲かるとかいった現世利益談、信仰体験の発表は全然みあたらない。教団自体の歴史が他の新興教団とくらべてないせい、体系化、組織化もすすみ、厚生施設、布教師の諸規定など落着いたムードにみち、教義にいう万教一元―積極的な他宗教との協力を呼びかけている。関西に育ち、関西の味をもった新興教団であるといえるであろう。

九月の彼岸すぎのお茶の一番おいしい時期のお心の準備として、八月号に誌させていただきましよう。

昔、口切と申しまして、九月の彼岸すぎたお茶はそれ迄しっかりとねかし、保存してありますので、この時期が一番おいしいことになります。玉露も新茶の出始めの頃は味がのらず、玉露独特の甘味、風味はうすらいでありますが、九月彼岸以後は大変おいしく、私どもの流れは、この時期には玉露をすすり茶として味わいます。

中国では、季節にはかわりなく、蓋付きの碗ですする茶を包種茶と申し、これは半醗酵茶の部類で、茉莉花等の芳香のある花の香りを着香してあるものであります。これをすすります。又、ウーロン茶を用いますが烏龍茶（ウーロン茶）は紅茶と緑茶の間をいって半醗酵の製法によって造られたものであり、これは最初に茶の葉を紅茶と同じ方法で萎れさせ、十分醗酵せぬうちに、今度は高温の釜に入れ、所謂釜入をなし、醗酵を止めて後揉捻機で適度に揉んで乾燥させたもの。風味・色合は、紅茶と緑茶の間とお思いに

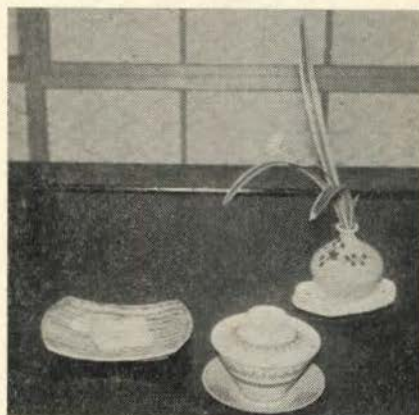
お茶をおいしく

—その8—

すすり茶

黄檗幽茗流家元

三浦純亭



なればよろしゅうございます。

日本人には体質的にも余りその味は合いません。私どもでは玉露をすすり茶として用います。カットのように磁碗の中に、小さじ山盛一ぱいの玉露を入れて、その上に人肌の微温湯をさします。急須の穴から通った茶汁より磁碗の蓋を少しずらして、かすかな隙間からすすりますと、濃厚でしかも、茶の一番おいしい時期故にそう風味よろしく、玉露の最高の味わい方です。もしお手許に磁碗がございませでしたら、普通の煎茶茶碗に茶さじ一ぱいの茶を入れ、其の上から茶さじ二ぱいの微温湯をさして、蓋は茶碗よりひとまわり小さいお皿を蓋にして、磁碗の中に落として（落とし蓋）、少しずらせ気味ですすり下さいませ。

以下は桃山時代に茶を口切りまで保存する様を、「真教師のロドリゲス」が刻明に記した見物記でございます。東大史料編纂所教授岡田幸雄先生よりお贈りいただきました御著書「南蛮史談」より抜萃

『壺の中に茶を入れる時には、まず、外部

の湿気を除くのに適当な温度で（壺を）

内と外から暖める。そしてそれが冷えない中に、つまり中の熱い清浄な空気が湿気を伴わない好い状態にある間に、その中に茶を入れ、乾いた、軽い、ある種の木の蓋でその口を封する。そして、その上にたくさんの紙の覆いを糊付けして、飾り立て、封印をし、茶を作った人の名を付ける。それからその壺を、きわめて優美な、麻布でできた、そして絹の紐の付いている清らかな袋に納める。それを、さらにある種の、湿気を防ぐ木の箱に納める。そして外から、さらに大きく封じ、封印を施す。それからその壺を涼しいので有名なきわめて高い、ある山に運ぶ。（○愛宕山か。）そこは湿気が少ない。そこに坊主の僧院がある。ここに壺を寄託し、涼しい場所に置いて、夏の間、暑熱のために茶が傷み、緑の色を失わないようにする。九月（すなわち十月）に寒さが訪れるころまで、そこに置いておく。その時になると、それをとって来させる。定まった場所で盛大な客人を新しい茶でもてなし、饗応を催し、賞讃を拍するため

ある。

はじめて新茶の壺を開くには、長い馴染の客または、その土地の領主に敬意を表わし、また山の家で、壺を保管してくれた坊主に賃賃料を支払う。あるものは壺を山に送る代わりに、水のない空井戸を掘ってそこに箱のまま壺を吊下げておく。その場所の涼気によって茶の味と色とを保たせるためである。」

以上でございます。風俗的にも面白いと思いまして書き抜かせていただきました。

現在では貯蔵場所は冷蔵庫になりましたが、あくまでも色を青く保存するのみで、荒茶の姿のまま貯蔵をなし再加工をなす。（人工加工で火加減のよしあしで味が良くも悪くも定まる現在）昔は天然状態で熟成させるためにロドリゲスの見物記のような保存法で有りましたが、現在は企業的で大量生産、昔は生葉（職人氣質）であったといえましょう。

又、昔は手の感触により良い葉を取りました。現在では機械により刈り入れるため茶の味は昔より自然にとります。御家庭で新茶の

出まわる時期に玉露を沢山求められた場合、上手に保存なさいますと、九月彼岸過ぎますと味ものつてまいります。

かように、九月過ぎまでねかしたお茶の喜ばれます事は今も昔もかわりございません。

すすり茶の二煎目の上手な味わい方

一煎目を味わったあと再び其の中に微温湯（人肌）をつぎ、すすりますが、この時一煎目よりやや出が悪いため両手の掌で磁碗を包むようにして、二、三回まわし、すすり味わいますが、御家庭では三煎味わい楽しめます。三煎目は更に四、五回まわします。要するに手の掌のぬくみと、まわす度数により濃く出るようになります。

一度お試し下さいませ。即席に淹され、しかも楽しく味わえますのがススリ茶のよろこびでございます。



【訂正】七月二十一頁下段四行目、粥座（しゆくざ）が正しく印刷の真違いです。訂正させていただきます。



謙 虚 な 態 度

元 成 山 玉

東京オリンピック以来スポーツに対する関心が高まった。戦後珍らしがられたプロレスや伝統を誇る相撲が下火になったのは寂しいが、あらゆる分野にわたるスポーツが成長したのは誠にうれしい。プロ野球の人氣は衰えぬにしても、つまらぬ試合だとサッカーに押されるというから驚く。

テレビの普及は更に拍車をかける。オリンピックの女子バレー試合、ソ連と日本が対戦した夜は、東京中の道路がまるで死んだようであったという。それほどではないが、最近目立ってファンの多くなったのはプロボクシングである。

白井がフライ級の選手権を失った後、努力を重ねた日本のボクシング界は、原田がバンタム級の選手権を獲得、愛嬌あるハワイの三世藤がジュニア・ウェルター級、沼田がジュニア・ライト級のそれを獲得、日本のボクシング界は花ざかり。黄金時代を迎えたといつてよい。

こうしたタイトルマッチがあると、サラリーマンは家路を急ぐ。先日行われた沼田とエ

ロルデ戦のときは、私も早々に帰って開始のゴングを待った一人。国際タイトルマッチであるから最初に両国の国歌が吹奏される。そのときの沼田の態度にはガッカリした。沼田は不遇な環境にありながら、まじめに努力を重ね今日になったという。相手は数回にわたる挑戦を無難にきりぬけた老練の技術者エロルデ。キリヤアにおいても話にならない。しかし晴の舞台で何とかこのまじめな若い沼田に勝たしたいというのが、全ての日本人と同じ私の考えであった。

ところが国歌が何だ、という落着かない沼田の態度に不快を感じ、この調子なら負けるだろうと思っていた。ところがゴングが鳴るとまるで反対。全く沼田のペースで試合は進む。しかも沼田は挑戦者らしくない、人を馬鹿にした態度で混乱戦法をとる。エロルデは動きの早い若い沼田についてゆくのが精一杯という感じ。わが家のテレビの前は、いつしかエロルデに送る声援に変った。沼田は若い、負けてもともと、しかも良い薬になる、エロルデ最後の花を咲かせろ、としきりに声援

がとぶ。といっても勝負の世界はきびしい。誰がみても沼田のポイントが上であった。沼田の右手が高々と上って場内はゴツタがえし。それと反対に若い沼田の勝利に拍手を送りながらさびしくリングを去るエロルデの姿はいかにも気の毒であった。試合であれば、どちらかが負けるに決っているもの、何としても私には後味が悪かった。

翌日の新聞は皆沼田の技術に賛辞をおくっていた。勝てば良く書かれるのが常であるが、一人ぐらい批判してもよかったろう。ところが数日後の朝日の投書欄に、某中学生が、沼田は勝負に勝って試合に負けたという記事を書いて沼田の悪いマナーを痛く批判していた。最近の学生は一般にドライで、道徳は低くなったと考えていた私も、やっと救われた心地がした。

建久六年（二巻）三月、奈良東大寺の落慶供養に出席するため、源頼朝は大勢の関東御家人をひきつれて上洛した。このとき見物の衆徒らが東大寺の門内に乱入して警国の随兵と紛争を起した。そこで梶原景時が行ってこ

のいざこざを静めようとしたが、景時に少しばかり無礼のところがあったため、かえって衆徒から叱りとばされ、言葉争いがよりひどくなり、このままだと衆徒の蜂起にもなりかねない状態になった。そこで頼朝は結城朝光をやって鎮めさせた。

結城朝光は頼朝の前に進み出て、手を大床の端にかけて立ちながら頼朝の命を受けた。つまり部下としてあるまじき横着な態度をとって命令を受け、そして衆徒のところにいて、今度は衆徒の前に跪いて、自分は頼朝の使者だと名のつた。そこで衆徒はその礼儀に感じて騒ぎをやめた。そこで朝光は頼朝の命をつたえていうことに、

東大寺は平清盛のために焼かれて空しく礎石を残して灰になってしまった。これは衆徒として悲嘆すべきことにちがいない。それを頼朝が大檀那となって造営に貢献し完成を見ることができた。今日はその供養を行なう日である。しかも完成を祝うために数百里の行程をしのいでこの大伽藍までやって来た。これは衆徒に

とって非常に喜ばしいことではないか。それなのに、このような紛争を企てるとはよろしくない。

と。そこで一同は静かになった。結城朝光は頼朝の部下として有名な勇士である上に、容貌が美麗であり、弁舌もあざやかであった。衆徒は、ただ軍陣の武略に達するだけでなく、靈場の礼節も心えておるものであるとして、大いに感心し、しきりに名を名のれといった。そこで朝光は結城七郎と答えて帰ってきた。

この話は強いばかりが武士ではない、礼儀を重じなければならない、というところに特色がある。人間と生れ自分の職業に努力することは当然である。プロのスポーツ選手であれば強いことが第一条件である。しかし観客あつての職業である。観客は強きのみを要求するのみではない。高度の技術、美しい態度の上の強きに拍手を送るのである。人ごとといわないで、われわれも謙虚なマナーを身につけなければならない。

浄土宗のおしえ

念仏の利益——丸山博正——

大相撲の解説で「誰々の優勝も、いよいよ他力本願になりましたね。」などと言われることがあります。また「彼は何をやらせても他力本願で仕事にならない。」などという使用われ方もします。これらの場合の他力本願という言葉は「相手頼み」とか「依頼心」という意味に用いられているわけです。浄土宗の宗徒の皆様に、今更申し上げる必要もありませんが、他力というのは、人間同士の依頼ではなく、人間の仏への阿弥陀仏への依頼なのです。この例でも分るように、世間一般に使用されている言葉の中には、もとは仏教用語であったものが案外多いのです。しかも、もとの意味を、次第に離れて使われているものがたくさんあります。もちろん、言葉というのは一種の「いきもの」で、時代により、意味が変化する場合もあります。しかし、変

化した意味だけは分っていても、もとの意味は分らなくなってしまうがちなのは困ります。今月は念仏の利益について述べるのです。この利益という言葉も、とかく結果のみを重視して考えられる傾向があります。有名な「壱坂靈驗記」では信仰によって沢市という人の眼病がなおるのですが、これも結果だけ取りあげるよりも、むしろ、信仰によって、眼病のために、こじれていた心の病がなおった。という精神的な、ありがたさが、根本だと思われまゝ。迷いの多いこの世にあって、信仰によって、迷いが取り除かれたとき、その人にとっては、そのことは、あり得ないことが、あり得た、すなわち、文字通り「有難い」ことになるのです。このようなしみと心に感じるありがたさこそ御利益なのです。

この欄では、往生のための内因である私共衆生の安心・起行・作業について解説し、さらに往生の外縁である阿弥陀仏の本願力について解説してまいりました。今月は、阿弥陀仏の本願力が、私共衆生にどのように及んでいるか、すなわち念仏の利益について、まとめてみたいと思います。先月の「三縁」も念仏の利益の一にはかなりません。

宗祖が「月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞ住む」と詠われたように、私共には常に阿弥陀仏の救済の手が差し伸べられています。私共は念仏により、次第に、阿弥陀仏の救済を身近に感じるようになるのです。そして宗祖の「いけば念仏の功つもあり、しなば浄土へまいりなん、とてもかくても、この身には思いわずらうことぞなきと思ひぬれば、死生ともにわずらいなし」と申された心境に、一步一步近づいてゆくのであります。善導大師も法然上人も浄土宗の各祖師方も、この思いわずらうことぞなき心境に到達し、そこで各々、阿弥陀仏の救済について解説をしておられます。経典の中にも、念仏の利益について述べられてある箇所は多く見

られます。今それらをまとめて整理してみると、大きくは現・当の二利益になります。

先ず念仏の当益ですが、これは念仏することにより未来に受ける利益という意味です。

念仏により未来に受ける利益と言えば、あらためて申すまでもなく、往生極楽です。浄土宗のおしえそのものが、念仏により未来に往生するというのですから、利益の根幹といえるでしょう。次に念仏の当益としてあげられるのが、五増上縁の中の摂生増上縁と証生増上縁です。五増上縁と申しますのは、普導大師が観念法門に述べられております五種の念仏の利益で、余の三については、後に述べますが、その中の摂生増上縁というのは煩惱に苦しめられていた衆生を仏の願力により、迎え引きつれて往生を得させることを言います。また証生増上縁とは、生というのは私共衆生の往生であります。証というのは証明することです。だれが証明するかと申しますと、弥陀・釈迦・諸仏であります。すなわち、私共凡夫が往生できるということを弥陀は、みずから、釈迦・諸仏もこそって証明されるのであります。宗祖が偏依普導

と申された三昧発得の普導大師の言として、私共は、よくよくこれらを味読すべきであります。

次に現益、すなわち念仏による現世の利益であります。浄土宗のおしえは、念仏によって来世に往生するのでありますから、特に現世の利益を強調する必要がないかも知れませんが、しかし、私共は現実生活しているのではありません。宗祖も選択集の第十一章段に現当の利益を説かれております。

念仏による現世の利益とは、一口に言えば、未来に往生出来るのだという安心立命であります。またそのような安心立命に、ともなう物的利益であります。いま、經典や、列祖の書の中から念仏の現世利益を説いてあるものを見てみますと、およそ次のようになります。

無量寿経には現益が二十ヶ所以上説かれております。よく知られている四誓の偈を見ても、普濟諸貧苦誓不成正覺（あまねく、貧苦を救うことが出来ないならば正覺を成じない。）とか消除三垢冥広済衆厄難（煩惱の中の主なものである貪瞋痴すなわち、むさぼりや、

怒りや、おろかきを取り除き、多くの厄難を救う。）などという文句が出てまいります。

私共は、むさぼりや、怒りの見苦しきを知っているながらも、なかなか取り除くことは出来ません。しかし静かに念仏し、阿弥陀仏と相對した時は、そのような見苦しい心が取り除かれているのです。そのような瞬間が次第に多くなり、濃厚になって来たとき經典の文句が單なる絵空事ではなく、非常な現実感となるのであります。自分ではない、阿弥陀仏の本願力によって、この安心立命感が得られたのだ。そうとしか考えられなくなるのであります。

観無量寿経にも念仏の利益が二十ヶ所以上述べてありますが、もつとも有名なものは、摂益文でしょう。「光明遍く十方の世界を照らし、念仏の衆生を攝取して捨てたまわす。」これで、すぐ思い浮かぶのは、「月影」の御詠歌です。法然上人は三部經釈で、この光明の攝取利益が、念仏にかざる理由を、三つあげています。光明というのは私共凡夫を自覚めさせる智慧や、救済する慈悲の光であります。その三つとは一、は平等の義です。阿弥

陀仏の救いは、平等に差しのべられている。すなわち縁はだれにも恵まれている。ただし、衆生の因がなければ、救済は成立しない。結局は念仏の衆生のみが光明の益を受けられるのだということです。二、は本願の義です。念仏以外の行は本願に誓われていない。念仏は本願の行であるから光明の益を受けられるということです。三、は三縁の義です。すなわち、先月号の解説にあつた親縁・近縁・増上縁です。以上のように観無量寿經には摂益文を説き法然上人もこれが念仏のみの受けられる利益であると申されているのであります。

阿弥陀經を見ますと、名号を執持することもしくは一日もしくは七日一心不乱なれば、その人の命終の時に臨んで、阿弥陀仏が、聖衆と共に、現在され、心が顛倒せず往生を得るという意味が説かれています。いわゆる来迎引接です。浄土宗で、三種行儀の中に、臨終行儀があるのはこのためと申せましょう。

以上のように三部經の中の現益の主なるものを拾ってみました。次に善導大師の先述の五増上縁の中、摂生、証生は当益でありま

すが、余の滅罪、護念、見仏は現世の利益であります。先ず滅罪増上縁とは、衆生が称名念仏をするときに長い間の罪惡が除かれるというのであります。次に護念増上縁とは、阿弥陀仏が常に念仏行者を影の形にしたがうが如くに護念しておられるというのであります。三に見仏増上縁とは念仏三昧によつて現身に阿弥陀仏を感じることが出来るというのであります。私共が称名念仏により阿弥陀仏を念ずる時、その一瞬においては、仏と相對し、過去の罪は胸中より消え、仏の護念を感じてしょう。そして、その境地が次第に深まって心が乱されないまでに到達できたならば、現身に仏を感じすることも出来るというのです。宗祖は日常生活に三昧発得されて、極楽の依正二報莊嚴を現前に感じされたと、三昧発得記にあります。もとより私共が、簡単にうかがい知る境地ではありませんが、そのような境地を理想として、念仏生活を力づけてゆくべきでしょう。

次に法然上人は、選択集の中で、観念法門の延年転寿を、また浄土宗略抄では転重軽受を説かれています。延年転寿とは、阿弥陀仏

の加護で寿命が延びることをいい、転重軽受とは、重い病を軽くすることを言います。

以上、三部經・善導大師、法然上人の中から現世利益を探ってみました。一応これらをまとめてみますと、大きく滅罪と見仏と護念にまとまります。称名念仏により、次第に仏の救済を身近に感じてくれば、過去の罪惡も現在の煩惱も次第に薄らいでくるでしょう。その結果として病気が軽くなり、寿命が延びることもあるでしょう。臨終には阿弥陀仏の来迎があるということが、現実感をともなってくるでしょう。このような結果を、しみじみと味わうのが、浄土宗徒の念仏の現世の利益です。そして未来には、極楽往生があります。これこそ浄土宗のおしえそのものであり、現益に対していえば当益なのです。いろいろと重複する面もありましたが、最後に再び法然上人の御法語を述べて終ります。

「いけば念仏の功つもあり、しなば浄土へまいるなり、とてもかくても、この身には思ひわすらうことぞなきと思ひぬれば、死生ともにわすらいなし」

御歌をいただく

これを見むをりくことにおもひいで、

南無阿弥陀仏とつねにとなへよ

(十二箇問答)

この御歌は十二箇問答の末尾に出ています。「これを見む」というのは十二箇問答をみるということであります。そこで御歌の意味は

十二箇問答を見るたびごとに、思い出し
ては南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、いつも
お念仏を唱えなさい。

ということ、明瞭直哉なお歌です。

凡夫には五つの障りがあります。即ち人を
欺しますし自らは怠けたり怒ったりします。

また他人を恨んで落ちつきませんし、怨み心
のために智慧が得られません。こんな人間で
もお念仏を唱えれば何故往生できるのでし
うか。また凡夫は愚癡の身でありながら、頭
の中では名譽と利益しか考えていません。ま
たお念仏を唱えても、すぐに俗事が浮んでき
て熱心になることも難しいし、念仏行者なら

それらしい暮し方の心掛けはどのようであつ
たらよいのでしょうか。心配になり出すと、
凡夫には凡夫らしい疑いと悩みがあります。
こうした身に憶えのある疑問を次々に質問
し、それに対して法然上人は一々にお答えに
なりました。この条項が十二箇条あるところ
から十二箇問答の名があり、かなりの長文
になっています。

お念仏を唱えれば男女貴賤に関係なく、ま
た善人悪人の区別なく往生できます。それは
重い石でも船に乗れば万里の海も渡ること
ができるのと同じであります。従ってお念仏
を唱えるのに、それが如法であつてもなくて
も、数通が多くとも少なくとも、阿弥陀さま
の本願を深く信じて口にお念仏を唱えれば、
必ず往生できることであります。

受け難き人身を受けているということに深
く感謝しなければなりません。そうすればた
だ慢然と無駄に人生を送るわけにゆかなくな
ります。更に逢い難き仏法に逢ったことを喜
ばねばなりません。お念仏を唱える生活ので
きる時には少しでも多くお念仏を唱えなくて
はなりません。

またお念仏以外の他の善を行なつても往生
に関係がないというが、なるほどお念仏は主
久であつて他の善は家来のようなものではあ
るが、他の善を行なつていけないということ
になりません。

それなら平気で悪を行なつてもよいかとい
うとそうはいえませんが。

「仏は悪人ですて給はねども、このみて悪を
つくること、これ仏の弟子にはあらず、一切
の仏法に悪を制せずということなし。悪を制
するに、かならずしもこれをとゞめ得ざるも
のは、念仏して、そのつみを滅せよとすゝめ
たるや」

といわれました。

そして最後の質問に対して次の通りお答え
になりました。

「悪人をもすて給はぬ本願とまかんに、ま
して善人をはいかばかりか、よろこび給はん
と思ふべきや。一念十念をもむかへ給ふとき
かは、いはんや百念千念をやとおもひて、心
のをよび、身のはげまれん程ははげむべし」
平凡に見えるお言葉の中にこそ真理がある
ものであります。

(村瀬秀雄)

読者の声

慨嘆せずにはいられない

日蓮上人は開目鈔という文章の中に「日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分にも及ぶ事なけれども難を忍び慈悲の勝れたる事は怖れをも懷きぬべし」と言明している。

これは日蓮は法華經について学問的に研究することは天台伝教に比べて千万分の一にも及ばないが難を忍んで慈悲を鍛えあげたという点においては天台伝教より自分の方が上だといつてもよいという意味である。これは日蓮が自分で言ったのであるから間違いないが、この文により日蓮は学問のない単なる修行者であつた事は明らかである。

衆生の中には学問のあるもの、ないものが共にいることは当然であるが、宗祖としては学行兼備が欠くことのできない条件である。学が乏しかった為日蓮は大きな間違ひを犯してしまったのである。その間違ひの第一は法華

經に帰依したことである。これは誠におかしい事であるが、釈尊は如何にしたら、人間の本能に基づく心の動揺から生ずる苦悩を除けるかを苦行の末遂にそれが因縁の真理であることを発見し、これを説いたのが法華經である。

ところが方便品に「止みなん舍利弗復た説くべからず。所以は何ん、……如是本末究竟等なり」とある。この止みなん舍利弗が法華經を絶対的難行にしているのである。これは釈尊がここまで舍利弗に言葉で説明してきたが、これから先は各自が体験し、会得しなければならぬ為釈尊でも言葉でそれを説明できなくなつてしまつたのである。それで、「もう自分には説明できないから、止めよう」と舍利弗に言つたのである。即ち体験によるコツは釈尊にも言葉で説明できなかった

たのである。それで最後に仏同志が常に研究していることを教えてやるから各自それを行なつて得せよと言つて十如是が教えられたのである。このコツを体得すること、これが法華經なのである。

これを創価学会第二代会長戸田城聖著方便品寿量品講義の中で一級講義として、「止みなん舍利弗の意味……」を取り違へ、「止めよう、お前にはもう説いて聞かせぬ、と言つたのであります」とある。釈尊に若し、本當に聞かせない氣持があつたなら、その後には十如是は教えてはいない。何とかして体得させてやりたい慈悲から十如是を教えたのである。戸田の説明は余りにも低級である。釈尊はこの法華經による衆生教化はどうしても難行で衆生が会得できず、釈尊の目的を達することはできなかったのである。その為に寿量品の最後に「どうしたら衆生を最高の道まで導いて、速やかに仏身を成就させられるのである。つまり法華經での衆生教化は失敗したのである。それで釈尊は次に大無量壽經の眞髓を観察する経として、観無量壽經が説か

れ、これにより釈尊の目的は達せられたのである。

日蓮は、釈尊が法華經による衆生教化は不可能であるとして捨てたものを、学がない為にそれが判らず拾ってそれに帰依したのである。

日蓮も亦法華經により衆生教化を行じてみた所、果して釈尊と同じ結果が現われてしまったのである。

ここで日蓮が学のある者ならば矢張り法華經を捨て、觀經に帰依したのであるが、凡夫が行のみで大成（実際にはこの大成は妄想である）した人だけにそれが判らず、反対に經文の解釈を訂正して衆生に受け入れられるようにしたのである。即ち釈尊が方便品に「令離諸著」と諸の執著の心を離せと教えたものを、日蓮は御義口伝（御書全集七三頁）の薬王品の項に「離の字をば、明とよむなり」と変えてしまったのである。つまり、執著の心を離すべきものであると理解すれば實際には離さなくともよいと教えたのである。戸田はこれに就いて人間には誰でも執著があるもので、もし執著がなければそれは人間で

はなくてお化けであると講義書に述べている。これは觀經第八觀に「行じていることを經文と合わせてみよ、若し合わなければそれは妄想である」と明らかに教えられているから日蓮の教えは仏教ではなく妄想である。

更に日蓮は念仏者は無間地獄へ落ちると念仏を誹謗している。日蓮は法華經のみ正法だと思っているが、法華經を捨てた釈尊は正法として觀經に正觀と念仏を説いているのを知らないのである。即ち正法には法華經と淨土三部經があるのを日蓮は知らなかったのである。

法華經陀羅尼品に「說法者を悩亂せば、頭破れて七分と作る」と教えてある。これについて日蓮は御書に独自の説明をしている。「法華經を弘める者の上に害を加えれば、頭が割れて七つになると書いてあるが、日蓮を迫害する者が無事に生きているのは不思議だと言う者があるそうだ。しかし、もう彼らの頭はとくに破れているのだ」と。これは有形の頭が破れる事を言ったものではなく、中味がめちやめちやに分裂してしまうことである。つまり精神の分裂を指したものである。

正法を誹謗してそれが大罪であることを知らない者は既に精神分裂してしまったのだと言われても一言もないわけである。

日蓮は法華經の大切な離の字の意味を勝手に変えたり、正法の念仏を誹謗して、しかもそれが悪いことであると気が附かない所が既に頭破作七分（精神分裂症）にされているのである。故に日蓮は宗祖であると宣言しながら、晩年には酒を過し、その害により自ら寿命を縮めたり、又立正安国論に不可能な意見を述べてそれが可能であるかの如くに信じてしまったのである。これでは宗祖としての資格は全くなく、矢張り宗祖としては学行兼備で誰からも尊敬され信頼される態度を取ってもらいたいものである。酒呑みの宗祖の教えは総て酔ってまともがつかないものになってしまう。前述の天台、伝教と比較して自分の方が上だと言うところなどは頭えきている人の言うのである。

このよっぱらい宗祖の末裔について考えてみよう、日蓮正宗の看板を出している創価学会がそれである。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 上人の往生 —

高 橋 良 和

さしえ 小林 健 造



その年の正月の京都はとても寒かった。

北山がすっかり雪で山容を変えたようにみえたし、比叡山も四朋の一帯に雪をかぶっていた。

建暦二年正月の頃である。

その前の年あたりから法然上人の健康がそうすぐれなかったことは弟子たちの間で噂にのぼっていたが、年が改まった正月からは食欲もないようであった。

上人さま、正月のお祝いの雑煮でございます。

と、すすめても、一向に上人はお膳につく様子もなく、どうやら老衰の気配がみえはじめたようである。

大分お身体の様子が悪いようで。

もしも大事になれば。

と弟子たちは集まると、上人の病状を案じていた。もしも御師匠さまが、そのときにはこの念仏のおしえをわかりやすくお説きいただいた書きものが欲しいな。

どなたかそれを上人さまにおねがいしては。

それなら勢観房がよい。

弟子たちは相談して、このことをきめたのである。

それはちょうど建暦二年正月二十三日のことであった。

法然上人の容態はその頃だんだん悪くなってきたのであるが、その日の昼さがり、おそるおそる勢観房は上人のそばに静かに坐ったのである。



お教えくださいませ、

お師匠さま、おねがいがございます。どうかわたくしち愚どんな弟子のために、浄土宗のことをまちがいなくおしえていただくものを書き残していただきたいのございします。

と申しますと、上人の口もとはかすかに動いたのである。

それではわたくしが筆をとって書き残しておこう。

というので、法然上人は自ら筆をとって書きだした。

もろこし我が朝にもろくの智者たちの……。

病気のなかから筆をとった上人の気迫はさすがであった、一字一字に燃えるような熱意がうかがえたのであった。

お師匠さま、ありがとうございます。もしも上人さまがいられないときにはどこを御遺跡にいたしましょう。

と勢観房がうかがうと、上人の眉がうごいたのである。

いいえ、わたしがいなくなっても、念仏の声のするところはみな遺跡です。どうかお念仏をしてください。

この声とともに上人はまた静かに床のなかに身体を横たえたのであった。

この勢観房が直接法然上人のねがいで書きつづったもの

が、一枚起請文（いちまいきしょうもん）といわれる。浄土宗の一ばん大切なおしえであつて前に述べた選択集（せんちやくしゅう）とともに上人が直接書かれたものである。この日からいよいよ上人の病氣は重く、もうとてもだめだというような氣配がみられたようであつた。

ところがその翌日の正月二十四日頃からこうしてすやすややんでゐる上人の口もとから、大きな声の念仏が出るようになったのである。

このような鈍い声の念仏が。

と弟子たちはおどろいたようであつた。

こうして上人の病重しを聞きつたえて、あちこちから弟子や、信徒がかけつけてきたので、吉永の庵室は溢れるような人になったのであるが、上人の声を助音する念仏の声が華頂山にひびいたのであつた。

そうして二十五日になったのである。そのときには上人の声はだんだんかすれてきたよう、弟子たちはさらに声をそろえて念仏するうちに、上人の唇はかすかにふるえるようにみえたのである。

どうやら御臨終らしい御様子。

との声に一同は声をそろえて、

こうみよう　へんじよう　じつぼうせかい

ねんぶつしゅじょう　せつしゅふしゃ

の文をとなえるうちに、上人の息は絶えたようである。

然しこの御臨終日もなお上人の唇が動いていたといわれている。それは建暦二年正月二十五日のことであつて、あたりに紫雲がたなびいたとつたえている。

沖を航海する船の唯一のたよりである灯台の灯が消えた

ように、沖の船人たちはなにをたよりに海原を渡るのだろうか。そのような事態におかれたのがその弟子であり、信者であつたといえる。

世のながが暗くなつた。然し、法然上人ののこしたおしえは永久に日本の国から消えることがないだろう。

亡くなつた法然上人の年は八十才であつた。

この亡くなつた地が今の知恩院であり、法然上人は弟子たちの念仏の声のなかに、この地に埋められたのである。

それは京都の東山の麓であるが、このような静かな往生の法然上人に歿後、日本の宗教界にはじめてといわれるくらいの法難が訪れるのである。

馬になる気



Hさんは競馬に凝ってすっかり財産をすってしまった。はじめて競馬に手を出したときに大穴を当てたのが不運のもので、どんなに負けても最初の大穴が目先にちらつき親譲りの少しばかりの身代を傾け尽したときに、ねらった大穴にかえて自分が落ち込んでいるのに気がついたが、そのときはもう手遅れであつた。困りきつて、とうとう伯父に泣きついた。伯父は、以前から彼氏に何度か注意はしてみたものの一向にききめがなかった。内心腹を立て意見しながらも、しょんぼりとうなだれている甥の姿を見て気の毒に思い多少の金を貸してやった。

ところが、その後どうしたとか、Hさんは三年ばかり全く姿を見せなかった。伯父は時折思い出しては気に懸けていると、ある日ひょっこりHさんがたずねてきた。驚いたこ

にとは少しばかりの金をもらつて、影法師のごとく立去つた三年前のあのときの彼氏とは異なつて、洒落れた背広服の身成りもきちんとしたHさんだ。彼氏はにこやかな顔つきで、借りた金を伯父に返しなから、「僕もあれから馬になつて……」

と言つた。おやおやこの競馬狂はまだ馬を忘れられず、馬でも買ったのか、と伯父は思つて、「馬に？」と聞きかえすと、実は………と次のように語つた。

Hさんは、あれから東京にもいたたまれず、母方の里に帰つたが、競馬で身代をすつた狂人が来たと云つて誰も相手にしてくれない。するともなく毎日ぶらぶらしている。檀那寺の和尚さんは東京の学校にいたころとあると聞かされて、話相手にはなるだらうと、二、三度たずねていつては世間話をし

ていた。その中に競馬の一条をすっかり和尚さんに話した。五十を越してもものわりのよさそうな和尚さんは、

「競馬では勝つも負けるも馬次第だらう。」と言つた。

「そうです。」きまりきつた質問に不服そうにHさんが答えると、

「あなたがいくら勝ちたいと思つても馬が勝つてくれなけりや、何にもならん。馬たのみでは頼りない話だな。いっそあなたが馬になつたらいいだらうに。そうしたら馬も一生懸命に走るからね。馬の他力じゃあてにならないよ。」

と言つて、眼玉をぎよろつかせてHさんにとらんだ。

Hさんはそれで悟つたんだそうである。馬だのみの人生では頼りない。自分が馬になつて、人生の競馬場で一六勝負やろう。

「親父の友達に心境を語ると快よく資本を貸してくれたので、それでもとの商売をはじめからやりなおした。」こう語つたHさんの姿は颯爽とたて髪を振つている馬のような面影があつた。(三太郎)

伺 御 中 暑

華頂学園長 水野隆樹 京都市東山区知恩院山内	熊本鎮西学園長 上田貞雄	蓮勝寺住職 浄土宗議會議員 柴田敏夫 横浜市港北区菊名町五二一	浄土宗議會議員 飯田信弘	神奈川県葉山町 相福寺 明照幼稚園 杉田義俊
静岡市日吉町二二二 華陽院・住職 社会福祉法人日吉保育園長 同 静岡市北安東保育園長 堀田良謙 電話 (52) 三六七三	株式會社 華頂庵 代表取締役 安藤法衣 京都(〇七五)法衣部(565)二四〇二 京都市東山区古門前東山線西入 法衣部(565)二四〇二	法然上人鑽仰會 佐藤密雄 佐藤隆智 中瀬秀雄 村瀬信彦 竹中林昭彦 宮居香山 安藤行信 佐藤哲雄 水谷成順 佐藤藤成 長谷川宣丈		

「浄土」講読規定	一部 定価 金六十円 (送料 六円)	会費一力年 金七二〇円 (送料 不要)	浄土 八月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十二年七月二十五日 印刷 昭和四十二年八月一日 発行 定価 六十円 編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷所 関 二三男 新光社印刷株式會社 東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六 發行所 法然上人鑽仰會 電話東京二六二局五九四番 振替東京八二一八七番
-----------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------	--

伺 御 中 暑

上宮学園

小林大巖

京都家政短期大学

学長 三枝樹正道

京都府宇治市槇島町千足八〇

東山学園長

藤原弘道

京都市左京区永観堂町

京都黒谷
西住院

戸川 壺俊

電話 075 (77) (〇七〇五番)
七七八〇番

浄土宗議会議長

稲岡 覚順

川口市北町二ノ五〇 西福寺

浄土宗議会議長

井原 文雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

浄土宗議会議長

小林 忍戒

京都市下京区寺町綾小路

浄土宗議会議長
浄土宗新聞主幹

白幡 憲佑

横浜市南区久保山 光明寺

芝公園

天光院

真野 龍海

伝統を尊び現代に生きる
説教を志して

小布施 弘学

長野市松代町東寺尾
長明寺 住職

だん王法林寺

信ヶ原 良文

京都・三条大橋東詰

真仏教舎教団会長

裏辻 賢洲

福岡県宗像郡福岡町
松原山大善寺 住職

伺 御 中 暑

総本山 知恩院

門主 岸 信 宏

執事長 鵜 飼 隆 玄

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五、三八

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎 尾 弁 匡

執事長 里 見 達 雄

大本山 光明寺

法主 大野 法 道

執事長 丸 地 弁 信

鎌倉市材木座六ノ十七
電話〇四六七(2)〇六〇三

大本山 善光寺大本願

法主 一 条 智 光

副住職 鷹 司 誓 玉

執事 早 川 利 雄

浄土宗宗務支所

支所長 稲 田 稔 界
事務取扱

鎌倉大仏高德院

住職 佐 藤 密 雄

東京都文京区小石川三十四一六
伝通院住職

大河内 隆 弘

電話 (814) 三七〇一

東京都港区赤坂四丁目
浄土寺住職

阿 川 貫 達

里 見 達 雄

大崎仏教会長
常光寺住職

大 谷 隆 雄

静岡県富士宮市東町三十二八

大頂寺 石 井 真 峯

電話富士宮(〇五四四二)三四六五

栗 本 俊 道

昭和十年五月廿日 第三種郵便可 (毎月一回一日発行)
昭和四十二年七月二十五日印刷 昭和四十二年八月一日発行

浄土 第三十三卷 第八号

定価金六拾円(送料六円)